

# 法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-06-01

## コネクション

美田, 直紀

---

(出版者 / Publisher)

法政大学国際文化学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

異文化 / 異文化

(巻 / Volume)

12

(開始ページ / Start Page)

153

(終了ページ / End Page)

157

(発行年 / Year)

2011-04-01

## コネクション

国際文化学部国際文化学科3年 衣笠ゼミ

美田直紀

これまでの自分は、国際文化情報学会に参加したことがありませんでした。1年生の時は「学会」という名前の堅苦しい雰囲気敬遠してしまい、2年生の時はSA先であるイギリスから行けるはずもなく、せいぜい帰国後に「そういうものもあったな」と軽く思い出す程度でした。どうせ自分はゼミになんか入ってないから無関係だ——と消極的に捉えていた部分も多かったかもしれません。そんなことを考えている間に、光陰矢の如し。歲月流るる如し。いつのまにか先輩の側として、この度、12月7日に開かれた国際文化情報学会には運営スタッフとして携わらせていただくこととなってしまいました。今年度、私にとって初めての学会を経て——何を見たのか、何を聞いたのか、そして何を感じたのかを、各ゼミの学生の印象に残った論文を中心として僭越ながらも此処に綴らせていただきます。

### 竹内ゼミ『歌舞伎「勸進帳」—なぜここまで絶賛されるのか—』

こちらは私が最初にお聞きすることとなった論文で、一連の流れを簡単に要約すると、勸進帳の魅力について説明をし、江戸時代の初演から現在に至るまでに姿を変えてゆく様子を述べた上で、「松羽目物」という新たなジャンルとして確立されたことを結論としたものです。私は歌舞伎についての予備知識は一切なく、観たことも聞いたこともなかったのですが、我々にも馴染みのある弁慶と義経が活躍する「勸



進帳」を下地として話が展開されていったので、とても分かりやすかったです。

また、第一印象では「国際文化と歌舞伎って関係あるの?」と疑問を抱いていましたが、聞き終えてから

その浅薄な思い込みは一蹴されました。能から歌舞伎への変換が行われた江戸時代における勧進帳の初演から——現在に至るまでに能に内包された“高尚さ”へと立ちかえる——換言すれば原点へと回帰する一連の流れは、近年の国際化する「日本文化」の在り方について客観的かつ相対的に強く考えさせられました。

### 堀上ゼミ『石川県羽咋市の地域活性化プロジェクト』

進みゆく石川県羽咋市の過疎化を防ぐべく、その振興を務める堀上ゼミの学生たちの活動の紹介したもので、一生懸命さが強く伝わってきました。具体的な内容はというと、年に2回の農家での滞在の下、農民と連携しながら空き地に巨大な棚田雛人形を設置することで、一連の活動は新聞などのマスメディアにも定期的に取り上げられるほど有名になっています。あくまで雛人形を製作して人心招致に努めるというのは目的のひとつであって、その間に横たわる学生と地域の住民との触れ合いがある時点で既に——お互いにとって何よりのプラスに

なっているのだと思います。

来年、自分もこの雛壇を観に訪れてみたくなりました。

堀上ゼミは「食と性」が研究テーマとなっており、どのように国際文化なのだろうと論文を聞く前から首を傾げていましたが、こちらはフィリピンといった海外においても農園化などのフィールドワークをされていて、内外において同様の活動をすることによって、蓄えられた知識が相互的に作用する——生かされるのだと思うと、その意味が分かったような気がしました。

ちなみに宣伝という訳ではありませんが、この村には特産物を存分に生かした農家カフェという施設があるそうです。

### 曾ゼミ『美し国、まいろう～伊勢志摩地域観光圏の実態～』

御存じの曾ゼミ生による発表は、座ることすらままならず立ち聞きされる方が続出する賑わいぶりでした。

その気になる内容は「観光圏」という言葉を軸に、客観的に伊勢志摩の人々による観光への取り組みの紹介を挟みつつ、その結果として明らかとなった問題点を述べてゆくもので、分かりやすく丁寧に製作されたパワーポイントには非常に好感が持てました。

特筆すべきは、単なる住民の観光の取り組みの紹介に終わるのではなく、その取り組み過程で新たに浮き彫りとなった「外国人観光客に対する住民の温度差」という課題を提示するという流れです。自分自身は観光なんて人を集められればそれで良いと思っていましたが、その集客によって文化的側面が疎かになってしまうという多層的な問題には全く気付きませんでした。

いずれも院生の方々による発表のレベルの高さに感嘆しつつ、各ゼ

ミ生による発表はその魅力を余すところなく伝えられるよう工夫されており、「このゼミにも入りたかった」と思わせるほどの力強さに溢れていました。

竹内ゼミのように同じ学部に、歌舞伎十八番の一つをここまで純粋に研究しているゼミがあるなんて知りませんでした。堀上ゼミのように同じ学部に、遠く離れた県での活動を行っているゼミがあるなんて知りませんでした。鈴木靖ゼミははっきり中国の研究が中心だと思っていたのに、学習 SNS サイトの模索をしているなんて知りませんでした。曾ゼミは名前こそ知っていても、Yokoso 日本という言葉だけが先行していて具体的に何をしているなんて知りませんでした。

残念ながらすべての方々への論文を見聞きすることは不可能でしたが、パンフレットや説明だけでは分からない等身大の国際文化学部を識る——とても良い機会になりました。

ただ、他の方々も言及されているかもしれませんが、実際に自分が論文の教室を回っている中、幾分か座るスペースの残されていたゼミがある一方で、有名なゼミは教室定員数を上回る来場者を叩きだしていたりと、各々の人数に大きく開きがありました。ポスターやインスタレーションなどの大教室にて集客を見込むことのできる分野においてはその限りではありませんが、論文は1回の発表、30分という限られた時間の中にて集まる人の数——すなわちゼミの知名度で決まるといった印象が強かったです。

これは、ばらばらの小教室にて行われるという形式上の問題点を明らかにしたのではないのでしょうか。それでも平等に論文をすべての人に聞いてもらうのは不可能に近いので、如何に事前の段階での宣伝を行うか？ という点が課題として残ったのではないかなと思います。

投票とは無関係に、何よりも素晴らしい論文があるにも関わらず人

が集まらないなんて  
もったいないです。

12月7日、ボア  
ソナードタワーを花  
火の如く彩った多岐  
にわたる発表が終  
りを告げた時、自分  
の胸に去来するのは  
——澄みわたる青空



のような気持ちの良い高揚感でした。

我々を体ごと別世界へと誘ったインスタレーション。限られたスペースの中、ありったけの工夫の詰め込められた鮮やかなポスター。役割分担がしっかりなされ、計画性に満ちたパフォーマンス。そして論理の結晶を表象した論文。これらは、いずれも1人で行うことは不可能に違いありません。ゼミという——共通する目的を持つ有志の集う場所の中でこそ、形を成し得たに違いありません。きっと自分は、そのコネクションに——強く胸を打たれたのでしょうか。

追体験レポートは以上となります。

2010年度の国際文化情報学会に携わることとなった各ゼミ生の皆さま、おつかれさまでした。

学会、楽しかったです。